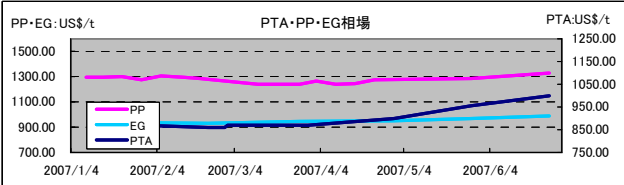
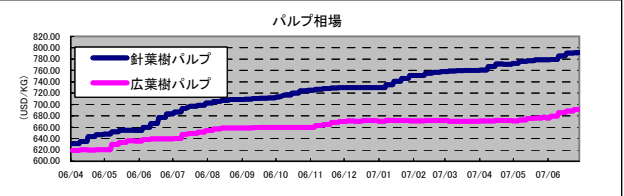


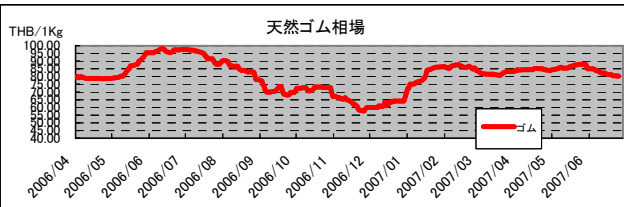
●6月終盤の動き ●122円/\$近辺でスタートし中旬途経過後、相変わらず好調の米国経済指標等の影響もあり利下げ観測が遠退き、金利差着目の円安が進行し、22日には4年半振り@124.12円迄進んだ。この水準では本邦輸入企業の大長期予約のハグア外等も相当行使され実需の円買戻し等もあり、一時@122円台中盤迄戻し@123円位水準で月末を迎えた。●今後の展開 過熱しすぎた高金利通貨への投資が気になる所。近年の相場形成の主役の投資ファンドが過去の痛みを忘れては考え辛く、膠着の合間を縫って日本株を買う動きに出ている観測もあり、一連の買が終了した段階での日銀利上げのタイミングでの円高への仕掛けも考えられなくはない状況。只、若干円安ながらも7月は小幅な動き@121.50~124.50円を予想する。



PX(パラキシレン)8社(出光興産、新日本石油精製、ジャパンエナジー、新日本石油化学、水島パラキシレン、大分パラキシレン、鹿島石油、三菱化学)の2007年定修予定によると、今年は全9工場中3工場で定修が実施される。また8社の実供給能力は294万5,800トンになる見通し。定修を行うのは新日石精製、水島パラキシレン、大分パラキシレンの3工場。新日石精製は10月から11月にかけて年産2475,000トン設備の定修を行う予定で、2007年実供給能力は46万9,900トンになる。水島パラキシレンは1月から3月にかけて28万トン設備の定修を実施したため、今年は4万6,000トンの生産ロスが発生する。しかし10月に生産能力を7万トン増の35万トンに引き上げるため、2007年実供給能力は24万5,500トンとなる。大分パラキシレンは5月から6月にかけて42万トン設備の定修を行うため、2007年実供給能力は生産能力を3万4,500トンを下回る。



アメリカのパルプ市場は依然タイトな状況が続いています。7月からの価格アップの提示も有り、平均してUSD20/トンの提示です。6月最終週の価格指標はUSD810/トンです。欧州市場でもタイト感変わらず。6月出荷増によりメーカー在庫は3日分(5月末には27日分程度)になりました。針葉樹パルプ指標はUSD791.25/トンとなっています。広葉樹パルプ市況では、5月の出荷は前月、及び前年当月を上回ったためメーカー在庫は下がっています。6月の価格アップが提示され一部浸透してきています。米ドルがユーロに対して少し強くなったため、ユーロ建てでは0.2%下がったにも拘らず、米ドル建て指標は0.4%上がって、USD691.50/トンとなっています。



ゴム相場は先月の動向から一転、主産地タイを含む東南アジアの原産地で好天によりタッピング(樹液採取作業)が順調に進んでおり、このまま天候が続くのであれば需給逼迫感は一掃され、先高値を突破して約200円の値上げを表明。3月から5月までの2ヶ月間で原料となるPTA,EGとも\$100/あたり急騰。昨年同様夏場に向けて更に上昇する。ホリプロビレン繊維もkgあたり25円以上を既に打出している。レーヨン短繊維は7月だけではなく、10月以降の値上げも視野にある。10月以降についてはキロあたり300円台が濃厚である。レーヨン海外市場では既に300円以上となっており、内外格差のは正へと動く。また、不織布価格もスパンボンドメーカーも7月以降の価格設定に動く。特にホリプロビレンSBは樹脂価格がナフサ高騰に伴い、キロあたり8%~10%の値上げを交渉する。ホリエステル及びナイロンスパンボンドは5%の値上げ表明となる。今後、ナフサ価格は60,000円前後を推移すると予想され、今後も値上げが予想される。

<不織布資材トピックス>

価格高騰

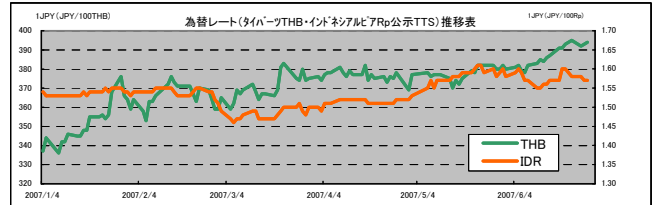
化学繊維メーカーの値上げの打ち出し表明が続いている。ホリエステル繊維は7月出荷から短繊維で約200円の値上げを表明。3月から5月までの2ヶ月間で原料となるPTA,EGとも\$100/あたり急騰。昨年同様夏場に向けて更に上昇する。ホリプロビレン繊維もkgあたり25円以上を既に打出している。レーヨン短繊維は7月だけではなく、10月以降の値上げも視野にある。10月以降についてはキロあたり300円台が濃厚である。レーヨン海外市場では既に300円以上となっており、内外格差のは正へと動く。また、不織布価格もスパンボンドメーカーも7月以降の価格設定に動く。特にホリプロビレンSBは樹脂価格がナフサ高騰に伴い、キロあたり8%~10%の値上げを交渉する。ホリエステル及びナイロンスパンボンドは5%の値上げ表明となる。今後、ナフサ価格は60,000円前後を推移すると予想され、今後も値上げが予想される。

<海外資材トピックス>

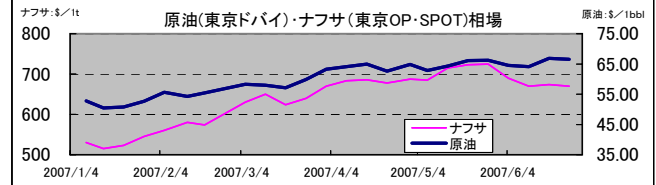
4年間で62%増大 経済社会開発銀行BNDESが強気の「投資地図」(ブラジル)

工業主1.05兆レアル、鉄鋼・紙・セルロースなど16部門で見込む。海外需要が強力で高まり、国内では所得増と消費増に支えられ、主要経済部門16の分野で今後4年間に1兆0500億レアルの投資が計画されており、02年から05年間の6500億レアルの投資を62%上回ることになるという経済社会開発銀行BNDESの投資地図がテイシェイラ、プーガ両エコミストを主力に作成された。フォーリャ・デ・サンパウロ紙が報道したもので、今後4年間はインフラが平均年率4.5%として実質で年率10.1%の投資増となり、国内総生産GDP比9%に相当。全インフラ投資の68%、全工業投資の63%をカバーするという計算で、全般的には妥当の評価であるが、インフラ部門では多少疑問点が付けられている。02年から05年まで、07年から10年までの主要工業9部門とインフラ4部門、並びにソフトウェア・サービス、住宅建設の投資額、年率伸び率の予想は別表の通りで、石油、ガス、鉱業、製鉄、紙・セルロースの9つの主要部門は国際市場の見通しから平均以上の投資増が見込まれている。インフラは電力、通信、衛生、鉄道、港湾の5部門である。工業9部門は今後4年間に3800億レアルを投資し、02~05年間の2070億レアルを実質年率で12.9%上回ろうという計算。対外規制はなくなり、世界的な好況が見込まれると見ての計算である。

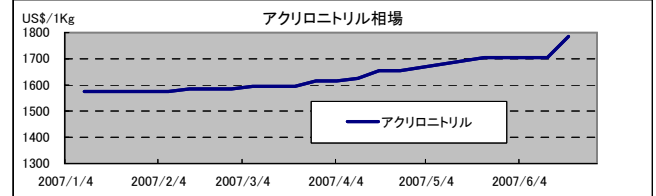
●本誌の記事・内容に関しまして、誤り等存在する場合がありますので、あくまでご参考の資料としてご利用頂きますと大変有難く存じます。
●本誌のデータは各種公表数字を基に作成しております。



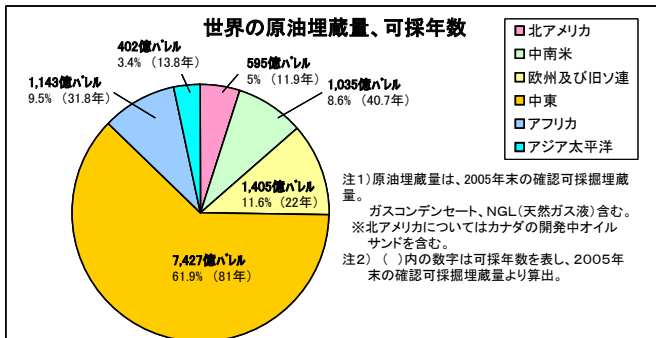
タイバーツ相場:6月先月同様概ね@34.55THB/\$付近を推移(オンゾア)。但し、オンゾア時間帯では@32THB/\$を割り込み、未だ小幅ながら上昇を続けており、円安の影響もありTHB/円では@4円/THBを意識する水準を上昇している。7月以降も先の投資規制解除等を手掛りに@33.75~34.75THB(オンゾア)のレンジ相場を予想する。但し地政学上の問題には要注意。インドネシアドル相場: @8,800Rp/\$近辺で月初を迎えたが、Rp高を歓迎し中銀は0.25%の利下げ(8.50%になる。今後利下げを異わせる)の実施、円先介入等から相場を戻し@9,000Rp/\$を越える水準で月末を迎える。7月も目下の状況は変わらず投資家の買中銀の動きの綱引きとなる。(@8,8000~9,200Rp)を予想する。



原油相場(期近物、終値)は、6月に入り上昇基調で推移しており、18日は69.09ドルと昨年9月以来の高値を記録した。最近の相場の変動材料をみると、6月13日に発表された米国週次石油統計では、製油所の稼働率が2週連続で低下し、ガソリン在庫が低水準にとどまり、相場の押し上げ材料視された。また、バレンステナでの対立激化による中東情勢の不安定化や、治安が回復しないナイジェリアでの状況も相場を押し上げる要因となった。WTI原油の価格は、欧州の指標であるブレント原油と対比して、相対的に弱い値動きが続いており、原油相場の本質は、WTI原油の値動きであるよりも強いと考えられる。欧州のブレント原油は、18日72.18ドルをつけた。今後も米国景気の改善とともに需給の引き締まりが予想され、年後半についても原油相場は緩やかに上昇する可能性があるとの見方が強まっています。



日本を含めたアジアにおける2006年のAN(アクリロニトリル)年間需要は、前年比4.9%増の299万トンとほぼ300万トン域に達した。中国を中心に需要の増加は続くと考えられ、2007年に300万トンを超えるのは確実だ。その一方で欧州や北中南米での減少傾向は依然として続いており、それぞれ2.6%減の108万トン、9.5%減の77万トンとなった。世界全体では1.4%増の517万トンで、アジアが世界需要を牽引する形がより鮮明となった。2006年における世界需要の用途別内訳はアクリル繊維向けが33.3%減の233万トン、ABS樹脂向けが5.9%増の169万トン、アクリルアミドやアジポニルなどその他用途が5.1%増の116万トン。2004年以降減少が続く繊維用途は比率が45%まで低下した。アクリル繊維に比べ割安なポリエステル繊維の品質向上により代替が進んでいるため、2007年には繊維大國・中国でさえもわずかながら減少に転じる見通し。



<インテリアトピックス>

日本発の世界ブランド「Design;Teija Bruhn」(テイヤ・ブルーン)誕生

ホームテキスタイルの新しいデザイナーズブランド「Design;Teija Bruhn」(テイヤ・ブルーン)が誕生、日本市場を皮切りに世界デビューを図る。テイヤ・ブルーンはスウェーデン在住のフィンランド人、フィンランドの最北端、北極圏の近くで生まれ育ち、現在はスウェーデン・ポロス郊外で、森と湖が望める自宅兼デザインスタジオを拠点に活動している。オーロラや白夜など、スカンジナビアの神秘的な自然の中で見つめた色と、シンプルだがこだわりのあるデザインは、テイヤ・ブルーンという一人の女性が、人生で何を大切にしているかという価値観の表現そのものである。日本とスカンジナビア半島は遠く離れ、風土・環境・生活習慣も全く違う。自然に対する接し方など、もの感じ方によっても異なる。日本人の暮らしのお手本になることも少なくないことから、自然との共生を大事に考えた北欧のライフスタイル提案を打ち出したブランドとして育てていきたいとしている。また素材では、コットンやワールといった天然繊維を多く使い、ポリエステルやアクリルなどの合成繊維は、必要が限り使っていない。さらに環境問題も考慮し、一部の商品パッケージは、ポーチとして再利用出来る。商品構成は、リビングファブリック、クッション、ラグ、バック、ポーチなどのホームアクセサリアイテム、寝装品。まずは、全国のアウトドア専門店及びパートナーショップにて独占販売し、追ってスウェーデン、フィンランドで発売する予定である。今後ホテルや食器、家具やアパレルも開発を先立って検討中とのことだ。

<金融・ビジネストピックス>

続ゼロ%台の「超低金利」

日銀が前代未聞の量的緩和策に踏み切り、政策金利を完全なゼロ水準に張り付けたのは、2007年3月まで。日銀はやっと06年3月に量的緩和策を解除、次いで同年7月にゼロ金利を解除し政策金利を年0.25%に引き上げました。そして、政府・自民党の米国の政策から、07年2月に政策金利をやっと0.5%まで引き上げました。一方、現在の米国の政策金利は5.25%、欧州連合(EU)の政策金利は4.0%となっています。問題は06年3月に量的緩和策解除で「非常時脱却宣言」をしたものの、依然としてゼロ%台から脱却できないままです(現在は公定歩合が0.75%、政策金利が0.5%)。BRICs(ブラジル、ロシア、インド、中国)をはじめ世界成長の持続などもあって欧米でのインフレ懸念が高まり、6月中旬に米国の長期金利は5.29%と高水準をマークしました。このため、日本の長期金利も2%の台に迫るなど、金利局面に反転の兆しがうかがえるものの、日本の金利水準は年内はゼロ%台(政策金利で0.75%~1%)にとどまる算が大きい。この超低金利状態の「異様」をわれわれはまず、自覚しておかねばならないでしょう。